

天瀬裕康先生の新作『梶山季之の文学空間』が上梓された。

先生はヨーロッパ中世を舞台にしたゴシック調の小説や、ヒロシマの被爆体験をテーマにした長編など、さまざま分野で健筆をふるっておられるが、その一方で小酒井不木などの評伝においても秀れた業績を残されている。

この度、梶山季之が採り上げられたのは、韓国生まれの梶山が終戦後広島に引き揚げ、広島高等師範（後の広島大教育学部）で青春を過ごしたことに端を発しているらしい。

「まえがき」には、平成十九年に梶山の三十三回忌に因んだ記念講演会やシンポジウムが、広島平和記念資料館でも催され、天瀬先生も参加、推進されたと記されている。

さて梶山文学の評価だが、実は私は彼

詳細を極めた資料の集積 人間像や作品の内容も浮かぶ

の作品をまったく読んだことがないので、残念ながら言及する資格を持っていない。もちろん「黒の試走車」や「赤いダイヤ」などの書名は知っているし、彗星のように文壇を駆け抜け、四十五歳でなくなった一世の流行作家という

評 山 田 遼



印象は鮮やかである。

また梶山の一人娘の美季さんと私の次女が、吉祥寺の明星学園の同級生で、小中、高校を通じて親しくしていたので、なにかにつけて彼の動静を耳にする機会があった。

ことに、その衝撃的な急死は、たしか中学二年のころだと記憶している。

このように比較的身近な感があり、しかもその作品とは無縁という立場でもって、天瀬先生の著作を拝読していると、その詳細を極めた資料の集積の上に、次に梶山季之の人間像が浮かび上がってくる。

そして梶山が最後に取り組んだ、未完のライフワークである「積乱雲」の内容も、おぼろげながら想像されるのである。

四十五歳で死亡した作家としては三島由紀夫、小栗虫太郎などが挙げられるが、いずれもこれからという時期に斃れているのが、惜しまれてならない。

天瀬先生の『梶山季之の文学空間』は梶山に関心がなくても、充分鑑賞に値する力作であり、秀れた評伝、文学論として、広く江湖に推奨するものである。

(深水社・2700円+税)